

令和6・7年度 小平市教育委員会研究推進校

# 生徒の「非認知能力」を高める指導方法の工夫

～自分の考えをもち、自分の言葉で表現し、行動にうつす活動を通して～



## あいさつ

小平市教育委員会 教育長 青木 由美子

小平第二中学校は、令和6・7年度小平市教育委員会研究推進校として、「生徒の『非認知能力』を高める指導方法の工夫」を主題に研究を進めてきました。

第4期教育振興基本計画では、「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」をコンセプトとし、「自己肯定感」や「人とのつながり」といった要素を向上させていくことが求められています。本研究は、これを具現化するために主体性を高めることに着目し、自主・自立を促す活動、自ら考え行動する力を高める取組、他者と協働しながら課題解決する取組などを、全学年の各教科や特別活動等を通じて、試行錯誤を繰り返しながら研究実践を重ねてきました。これにより、生徒が自ら進んで行動する姿が多く見られるようになったことは大きな成果であったと捉えています。

結びに、本研究の推進に御尽力された吉田功校長をはじめ教職員の皆様、並びに懇切丁寧に御指導くださった汐見稔幸先生に心より感謝申し上げます。

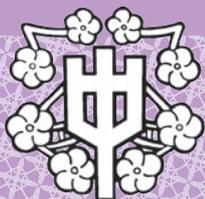
## はじめに

小平市立小平第二中学校 校長 吉田 功

AIの急速な発展は、人間の思考や行動の多くをAIが実現する社会を予測させます。この時代においてAIがどれだけ進化しても、その思考の目的を与え、目的のよさ・正しさを判断するのは、人間の最も大きな強みとして残ります。

したがって、これからの時代に求められる力は、「非認知能力」に集約されます。これは、変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決する力、情報を再構成し新たな価値につなげる力、そして目的を再構築できる力です。

本校は、令和6・7年度の小平市教育委員会研究推進校の指定を受け、非認知能力の向上に焦点を当てた研究を進めてまいりました。非認知能力は幅広いため、本校生徒の実情を踏まえテーマを絞り込んでいきました。この研究が未来を担う生徒たちの教育に確かな意味をもたらすよう、本リーフレットを御覧いただいた皆様からの忌憚のない御指導・御意見を心よりお願い申し上げます。



# 小平市立小平第二中学校



## ● 本校の教育目標

1	自ら考え、正しく判断し、積極的に実践する人間
2	明るく健康で情操豊かな人間
3	社会の一員として協力し、向上に努める人間
4	相手の人格や立場を尊重する人間

## ● 教育目標を達成するための四つの柱

1	生徒のウェルビーイングを高める
2	生徒の学ぶ意欲や学力を向上する
3	家庭や地域との連携を強化する
4	教職員一人一人が高い志をもち、組織力を高める

### 1 研究主題

## 生徒の「非認知能力」を高める指導方法の工夫

～自分の考えをもち、自分の言葉で表現し、行動にうつす活動を通して～

### 2 目指す生徒像

## 主体性を高め、自ら進んで行動できる生徒

小平第二中学校では主体性を、「自分の意志や判断により責任をもって進んで行動することに加え、共に生活する人のことを考えること（公共性）や、自分を省みること（客観性）や、社会のルールを守ること（規範意識）を伴ったもので、集団生活や今後の社会生活での基盤となるもの」と捉える。

### 3 研究主題設定の理由

本校は学校行事や生徒会活動において、伝統的に「生徒主体」を掲げ、生徒を中心に準備や運営から活気ある行事や教育活動を実践している。生徒の活躍を自他共に認め合い励まし合う活動により、生徒の自信を高め、更に先輩から後輩へその精神を受け継ぐ活動として本校の教育活動の中核を担っている。

令和6年度よりこれまでの本校の教育活動を振り返り、その意義を再確認しながら、学校経営方針に示された「生徒のウェルビーイングを高める」ことを実現する教育活動を工夫・改善しているところである。

文部科学省によると非認知能力は「自分の目標を目指して粘り強く取り組む」、「そのためにやり方を調整し工夫する」、「友達と同じ目標に向けて協力し合う」、という3つの観点からまとめられている。さらに、これらの能力が生徒のウェルビーイングの向上に欠かせないものであるとしている。これらは、本校が実践してきた教育活動を通して育まれる資質・能力と重なる部分がある。

本校の教育活動を基盤に生徒の非認知能力を高める指導方法について研究し、教育活動に取り入れていくことで、これからの社会で求められる資質・能力（非認知能力）を一層高めることができると考え、標記の研究主題を設定した。

### 4 研究仮説

以下の仮説を立て研究主題に迫るものとする。

全ての教育活動の中に、自分の考えをもち、自分の言葉で表現し、行動にうつす活動を取り入れることで、生徒は自らの主体性をより高め、自ら進んで行動できるようになるであろう。

### 5 研究の方法

各教科、総合的な学習の時間、特別の教科 道徳、特別活動（学級活動、生徒会活動、学校行事）など全教育活動で、「自分の考えをもち、自分の言葉で表現し、行動にうつす活動」を実践し、生徒の主体性の育成を目指す。

## 6 研究の内容

### 教員によるワークショップ「目指す生徒像」の設定

教員間で議論を重ね、目指す生徒像を「主体性を高め自ら進んで行動できる生徒」とした。

教員間で共有した定義

**主体性** 自ら進んで行動できる

公共性

客観性

規範意識

### 令和6年度の研究テーマ【「主体性」に焦点化した教育活動】

これまで行ってきた教育活動について、「主体性」に焦点化して教育活動を見直し、改善して、実践を積み重ねた。また、教員同士が実践した教育活動を共有し合うことで生徒の主体性の向上を図った。

### 教育活動「自分の考えをもち、自分の言葉で表現し、行動にうつす活動」の実践と共有

#### 授業公開（年3回）

2月には講師の小野江隆先生より授業について御指導をいただいた。「周囲の生徒を伸ばすこと」や、「教員の個性（強み）を活かすこと」など、御助言いただいたことを日々の教育実践に活かしている。

#### 実践の共有



小平第二中学校ウェブサイトを活用して、研究の様子を保護者や地域とも共有した。

「学校日記」→カテゴリ「研究」  
(2025年度・2024年度)

### 令和7年度の研究のテーマ【方向性を合わせた教育活動】

これまでの実践を踏まえ、全教職員が方向性を合わせて指導にあたった。また、指導の効果を高めるために、校内研究会では3つの「観」を意識し、教員のワークショップを中心としたサイクル型の研究を行った。

### 3つの「観」に焦点をあてた研究の推進

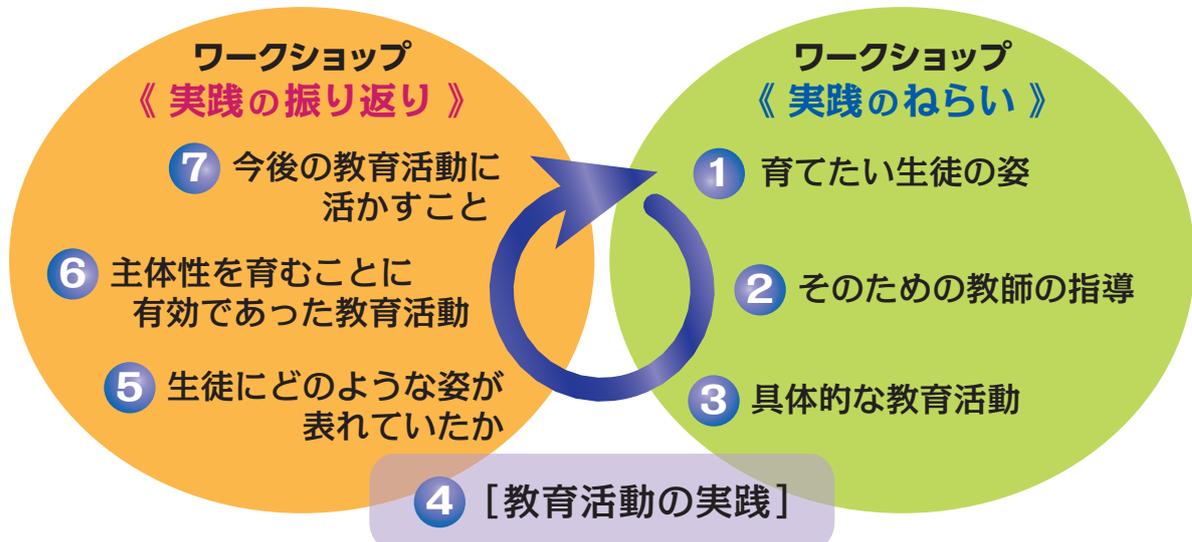
令和6年度の実践を経て、「非認知能力の向上をどのように捉えればよいのだろうか」という課題があった。生徒アンケートではおおまかな傾向は把握できるものの、そもそも非認知能力を数値的な評価をすることの難しさがある。そこで、次の3つの「観」に焦点をあてて、取組を計画したり振り返ったりして非認知能力の向上を試みた。

**指導観** — 育てたい生徒の姿

**生徒観** — 表出されている生徒の姿

**授業観** — 授業公開での協議の視点

### PDCAサイクルに基づいた教育活動の実践



## CS（コミュニティ・スクール）による「非認知能力」に関する活動

本校で研究を進めている「非認知能力」について学校経営協議会委員を中心に、「保護者・地域だからできること」について話し合い、様々な取組を実践した。

### CSによる活動例

- ◆ 「コミュニティ・スクールだより」でのシリーズ「非認知能力ってなに？」の発行
- ◆ 非認知能力についてのワークショップ（大人も考えてみよう）の実施
- ◆ 生徒・保護者・教員へのアンケート調査の実施  
「社会の中で自分がやりたいことを実現するには、どのような力があつたらよいでしょうか。」
- ◆ 非認知能力理解授業の実施  
「生徒が地域の方・教職員から社会での体験談（どのような力が役立っているか）を聴き、自分が社会に出て生きていくうえで大事な力は何か、どのような力を高めていきたいかを考える」
- ◆ 研修会 夕見稔幸先生による講演会 地域の方・保護者の方を対象に実施  
テーマ「『非認知能力』を高めるために、保護者・地域だからできること」

### CSの方からの声

CS委員として、学校での研究テーマを聞き、「『非認知能力』って何だろう？」という疑問から始まりました。そこから、CS委員と協議する中で、「こどもたちの『非認知能力』が高められたらいいな」、「学校だけでなく、家庭・地域の影響も大きいから、何か働きかけてみたい」、「保護者・地域の方と学校と一緒に考えたい」などの構想が広がりました。チームで考えていくうちに、我々大人の『非認知能力』が問われ、その重要さを実感しました。これをこどもたちにどのように反映できるかが、今後の我々の課題です。

## 7 まとめ

### (1) 令和6年度 成果と課題（生徒アンケートによる生徒の実態把握を活用した教員による分析）

#### 成 果

##### 【生徒アンケートの結果より】

年間を通して、集団活動に参加・協力したり、自分の役割を果たそうとしたりする意識が高い。

##### 【教員による分析】

生徒中心の行事を通して、集団として協力したり、団結したりするチームワークがよく育っている。各教科等におけるグループワークにも活かされていて、協力する風土がつけられている。

#### 課 題

##### 【生徒アンケートの結果より】

学習や将来への不安を感じている生徒や、進んで表現することや行動することに自信のない生徒が多い。

##### 【教員による分析】

コミュニケーションに不安を感じる生徒が多く、人間関係が広がらない様子がある。様々な場面で意見を共有したり、一人一人がそれぞれの役割を果たしたり、さらにお互いを承認し合える取組が活発になるとよい。

### (2) 令和7年度 実践の振り返り（各学年・学級、各教育活動の取組については資料を御参照ください）

実践を通して見られた生徒の姿	主体性を育むのに特に有効であった教育活動	今後の教育活動に活かすこと
<ul style="list-style-type: none"><li>・学習に必要なことを自分で調べ活用できていた。(G組)</li><li>・感謝の手紙（自立活動）では、感謝のメッセージをお互い考え渡し合うことで自己肯定感の高まりが見られた。(S組)</li><li>・進んで人前に立ち、自分の言葉で話ができる場面が増えた。(第2学年)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・合唱コンクールにおいて、全学年統一で行った「生徒が主導して練習計画を立案し、修正しながら実施する取組」は、生徒が先を見通し、協働しながら主体的に活動することができた。(全学年)</li><li>・実行委員主体の形式での活動は生徒が役割・責任をもつことができる。(第3学年)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・振り返りの活動を繰り返すことで、現状を把握し、よりよい活動を考える習慣を身に付け、行動に移す力を育てた。(第1学年)</li><li>・教師が意識して良かった行動や場면을生徒に言葉で伝えることで、主体的な行動をさらに促進し、集団に広げることができるとよい。(第2学年)</li></ul>